『種に似ている』（マタイの福音書 13 章 31-35 節）2022.8.28.

＜はじめに＞「だれが、その日を小さなこととして蔑むのか」(ゼカリヤ 4:10)
「あなたの始まりは小さくても、あなたの終わりは、きわめて大きなものとなる」(ヨブ 8:7)。

Ⅰ　天の御国

①「天の御国は近づいた」

「天の御国」はマタイ独特の表現で 33 回用いられています。バプテスマのヨハネ(3:2)、イエス(4:17)、弟子たち(10:7)に共通するメッセージ主題です。当時のユダヤ人は民族国家再興を待望していましたから、それとは異なる「天の御国」を示そうとしています。

②たとえで話すイエス(34)

「天の御国」と聞くと、直感的に「天国⇒死後の世界」ととらえる人は少なくありません。これらの誤解に対して、イエスはたびたび「天の御国」について語っておられます。群衆に対しては必ずたとえで語られました。弟子たちもそれについて質問しています(10)。

③隠されていることを語ろう(35)

天の御国は不可見的です(ルカ 17:20)から隠されているように映りますが、神はたとえを通して天の御国を語り示し続けておられます。たとえに秘められた真理を見出す者は、天の御国は現実的なものとして受け取ります。ですから、たとえに耳を傾けましょう。

Ⅱ　二つの短いたとえ(31-33)

①からし種(31-32)

からし種は 100 粒で1gほどですが、生長すると人の背丈を越えるほどの木になります。イエスは極小の代表としてからし種を取り上げます(17:20)。なぜそうなるのでしょうか。イエスはからし種が天の御国とどんな点で似ていると言われるのでしょう。

②パン種(33)

3 サトン(約 40 リットル)の小麦粉で作るパンは一度にできる最大限で、およそ 100 人分のパンに相当します。これに混ぜるパン種はわずかです。イエスは出来上がったパンではなく、パン種に注目しています。天の御国とどこが似ているのでしょうか。

③時間の経過とともに

小さなからし種がやがて鳥が巣作るほどの木となり、種を入れたパン生地が大きく膨らみます。これを魔法や奇跡とは人は言いません。条件を整え、時間が経過すると必ずそのようになるものです。天の御国もそのようなものだとイエスは言われます。

Ⅲ　たとえから発見する(31-33)

①天の御国はいのち(31-32)

からし種に大きく生長したのは、いのちがあったからです。国の力と勢いを、権力(者)や組織(力)に期待するのが常です。しかし天の御国はいのちの種です。それを受け取り、育むところに拡大成長します。今は小さくても、やがて大きく育ちます。

②天の御国は影響力(33)

今は天の御国は小さく、人目につかないかもしれません。しかし、この世の中に天の御国が入り込んでいくとき、全体に与える影響は決して小さくはありません。周りに呑み込まれたように見えても、周囲を変えていく力が天の御国にはあります。

③天の御国はどこに

天の御国はどこにあるのか、いつ到来するのかと思う人に、イエスは答えています。「神の国はあなたがたのただ中にあるのです」(ルカ 17:20-21)。人の内側に蒔かれた天の御国の種は、やがて芽ばえ育ち、周囲をも変える力を秘めています。信じますか。

＜おわりに＞ 天の御国を周囲に見出そうとする人は、昔も今も少なくありません。そして、失望してはいないでしょうか。しかし、イエスは天の御国はもう始まっていると言われます。隠されている天の御国をこのたとえから見つけ出すように、と期待してイエスは語られます。(H.M.)